

タキーレ島の編・織文様と生活文化

伊地知 美知子*

Pattern of Textiles in Taquile Island and their Livelihood Culture

Michiko IJICHI

要旨 南米ペルーにあるタキーレ島にはインカの末裔であるケチュアの人々が農業と編物・織物を中心とした暮らしをしている。島民は数十年前まで陸からほぼ孤立し、独自の文化を守り続けてきた。彼らの製作する編物や織物には親から子へと受け継がれてきた伝統的な文様が表現されている。その文様は彼らが日常的に身に付ける帯や帽子に配されており、農業に関連した畑、鳥、星、祭等の図柄が多く見られる。それらの文様は畑仕事のよりどころとして、星の位置や鳥の行動に播種や収穫の時期を予想し、年中行事の祭祀に豊作祈願や感謝をするという、農業を最も重要視する彼らの生活様式を象徴している。

キーワード：タキーレ島 文様 編物 織物 伝統

1. はじめに

タキーレ島はアンデス山脈のほぼ中央、船が運航できる世界で最も高い標高に位置するティティカカ湖に浮かぶ全長6km、面積11km²の細長い島(写真1)である。島の概要と島民の衣生活全般

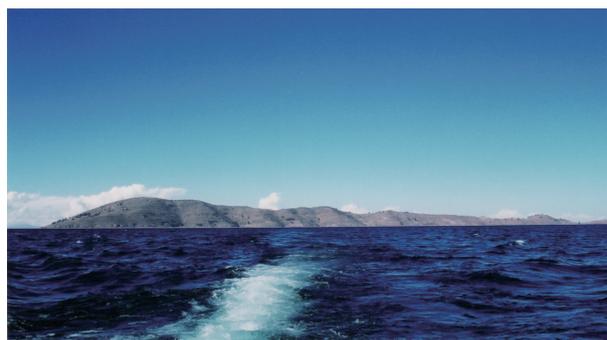


写真1 タキーレ島

については前報¹⁾にて報告した。本稿では、彼らの生活の一部となっている編物や織物の構造と、そこに表現されている幾何学的文様の意味と生活

様式との関わり方を中心に、2000年8月、2001年12月に加え2011年3月の3回におよぶ調査の結果得られた知見をもとに報告する。

2. 島民の生活

2.1 生活形態

島は6つの地区に分かれており、世帯数は2011年3月時点の島役場の帳簿によればESTANCIA地区48世帯、KOLLINO地区79世帯、HUAYRAPATA地区72世帯、CENTRAL地区92世帯、HUAYLLANO地区69世帯、KESURA地区66世帯の合計426世帯である。この島では結婚すると生家を出て新しい土地に家建て1つの世帯が成立する。1世帯当たりの家族構成について4例を挙げてみると、E家：夫婦+子5人、F家：夫婦+子2人、N家：夫婦+子5人、R家：夫婦+子5人となっている。このことによりほぼ2500人前後の人々が生活していると推察される。

彼らの家屋は1階または2階建てで、主に石と干し煉瓦とトタンでできている(写真2)。就寝

*いぢち みちこ 文教大学教育学部学校教育課程家庭専修

空間、台所、トイレはそれぞれ別棟になっている。台所ではユーカリの枝や牛糞等を燃料に煮炊きをし、家族揃って食事を取るが、直接火を扱う作業があるため防災上の意味も含めて独立させ、また、トイレは排泄物を肥料にし易いよう畑近くに位置づけられているようである。



写真2 家屋

10年前の調査では、殆どの家庭が電気もガスも水道もない暮らしをしていたが、今回は小型の太陽光パネルを掲げ電力を得たり、湖岸の町プーノからガスボンベを購入してきてガスコンロを使用する家が増加し（写真3）、テレビの受信アンテナも見られるようになった。しかし、まだ飲料水や生活用水は雨水を溜めたり、島に唯一ある水汲み場から毎日調達している家が多く、家まで水を引き入れ便利な暮らしを始めている家庭は極々一部であった。



写真3 台所：2001年と2011年

島の広場にはカトリックの教会が1つあり、ス

ペイン統治時代に持ち込まれたキリスト教が信仰されている。また同時に地母神パチャママ崇拝も根強く残っており、農作物の豊穡、子供の無事成長等、事あるごとにココの葉とチチャ（とうもろこしで作った酒）で祈りが捧げられる。

2.2 子供の成長と儀式

島の人々が生まれて初めてキリスト教に接するのは生後まもなくのことである。生後1、2日でタキーレのカトリック伝道師により洗礼を受け、乳児は代父母の出席のもと名前を授かる。代父母は最初は1組、子供が成長するにつれもう1組立てられる。代父母を依頼するにあたり、父親はココの葉の入った祭祀用具を贈る。相手がそれを受け取るならその子に対する責任を受け入れたことになり、代父母の成立となる。代父母は乳児に最初のおむつを贈るしきたりがある。

生後8日目になると乳児を初めて外に出す。父親が木で作ったミニチュアの道具を与える。もし男の子なら畑仕事に必要なすべての道具が、女の子なら織物に関するすべての道具が与えられる²⁾。女子と男子の役割分担はここから始まっているといえよう。生まれてから歩き始める1歳位までの間子供は手足が真っ直ぐになるように、また、魂が容易に抜け出さないようにとの理由で、まず、肩から足の先まで何枚かの織物でしっかり包まれ、その周りを帯でびったりと巻かれる。写真4は近隣のカパチカ村のものである。タキーレに限らずこの辺りではこの方法で乳児期を送らせていることがわかる。わが国では股関節脱臼防止



写真4 乳児のくるみ方

のため蛙股にさせるのが一般的であることと対照的である。

1, 2歳になると「初髪切り」³⁾の儀式が行われ、2組目の代父母はこの時立てられることが多い。島内の人同士でこの役割は果たされていたが、最近では同じペルー人でも都会の人や外国人に依頼するのが流行している。子供の将来のため、少しでも社会的地位の高い、あるいは経済的余裕のある人に頼むのがよからうと親たちが考えるようになったからだという。この儀式はインカの時代から行われていて、代父母をはじめとし参加者の手により1房ずつ切り取られた髪は、ココアの葉と共に地中に埋められる。1990年代までタキーレ島では1歳までに命を落とす子が20%にも上っていたという。厳しい自然環境の中で乳児期を無事に送ることができたことを地母神パチャママに感謝し祈るこの儀式は、子供のコミュニティへの参加の第1歩をも表わしている。女の子は代父母から贈られる羊や一揃いの服で、牧羊や織物の技術へと導かれるのである。

2.3 島の観光地化による影響

タキーレ島が観光地化されたのは、今から30年程前のことである。ティティカカ湖畔の町プーノで企画されている「ティティカカ湖ツアー」は浮島のウロス島の日帰り、ウロス島+タキーレ島日帰り、ウロス島+アマンタニ島(1泊)+タキーレ島というのが主流である。その為タキーレ島は船の着港と出港に合わせ、毎日11時頃から午後2時頃までの間レストランで食事を取る者や土産物を物色する観光客で賑わう。

観光地化される前は、島民は農業と編物・織物を中心にした暮らしをしていたが、観光業に携わる者も多くなってきている。実際、10年程前まで、夕方手漕ぎの船を漕ぎ出し網を仕掛け、湖で1夜を明し明け方網を引き揚げ、広場の食堂に卸すという漁業を生業にしていた者も、大型の船を購入し観光業へと転業していた。1日の運行時刻はプーノから朝8時頃の出港、タキーレを出港す

るのは14時頃と決まっているので、プーノでは簡易宿泊所で翌朝を待つという暮らしである。

農業、牧畜も行われているが自家消費量に過ぎず、直接現金収入に結び付くのは観光業や共同販売所で観光客に売られる編・織製品だけである。共同販売所では価格統制がされていて、島民は平等に利益をもたらされる仕組みになっている。品物にはそれぞれ各家庭の番号が付けられており、1ヶ月ごとのローテーションで各家庭の製品が交換される。展示期間が終わった家庭はすべての製品を引き上げ、次の展示に備え、売れたものの補充や新しく考案した作品の製作に取り掛かる。販売人の登録は400件を越えており、島の殆どの家庭が登録していることになる。すべての家庭に販売の権利が平等に与えられ、価格統制を行う方式にはインカ時代からの風習であるコミュニティを大事にする精神が生きている。

販売される製品は最初の頃は自分たちの使用していた帽子や帯が主流であったが、近年では自分たちは使用しないが観光客に喜ばれそうな物、例えば手袋、鍔付帽子、ベレー帽、マフラー、ベスト、ヘアバンド等が並べられるようになった(写真5)。



写真5 共同販売所

こうして得られた収入は主に子供たちの文房具や島では収穫できない野菜、油、粉類の購入に充

てられる。貨幣経済が盛んになった島には陸からの行商も見られるようになった(写真6)。



写真6 行商

3. 編物・織物

3.1 糸紡ぎ

男子も女子も糸を紡ぐ。特に女性の、放牧しながら、農作業の合間や行き帰り等移動しながらの作業を多く見かける。彼らの手にはカンティニーニャ(木でできた簡単な紡錘車)と一塊りの羊毛が握られている(写真7)。以前は高地で暮らす人々と物々交換し、アルパカやリヤマの獣毛を原



写真7 糸紡ぎ

材料にしていたというが、近年ではスペイン時代

に持ち込まれた羊を自家で飼育し、その毛を使う。黒、茶、灰色毛のものはそのまま、白はそのままか赤、青、黄、緑等に染められる。桃色～赤～紫に染めるコチニール以外は、島に自生する植物を煮出して染色を行う。例えば緑は Quinual, Chilca, 茶は Saka Saka, 黄は Kolle, Solina 等である。

紡ぐ方法はカンティニーニャの上軸を両手で挟み、左手を手前に右手を前進させるのが一般的で、その結果右撚り(S撚り)の糸が出来上がる。実際織物に使用する糸はこうしてできた単糸を、強度を増すため2本撚り合わせるので左撚り(Z撚り)のものになる。インカの人々の間では、左撚りは普通とは違うという意味を持ち、平織物に視覚的効果をもたらすと共に、その魔術的機能で身を守ることができると言われている。

前述のように羊毛から糸にする方法も続けられてはいるが、近年、染色済みの糸も入手し易くなった為、購入した糸を使用することも多くなってきている。しかし、販売用の帽子等には中細の糸をそのまま使用するが、自分たちの身に付ける物は購入した極細の糸に更に撚りをかけ強く細くし使用する(写真7左下)。材質は土産物には羊毛が多いが、自家用には鮮やかに染色が施されている化学繊維のアクリル糸を好んで使用している。

3.2 編物

編物をするのは男性である。誰もが皆日常身に付ける帽子を編む。糸紡ぎと同様、歩きながら、世間話をしながらと、いつでも彼らは編んでいる。前報¹⁾でも触れたが、タキーレの人々は帽子で身分や既婚、未婚を表現する。赤と白が基調色で、上半分白くするのは独身者、すべて赤は既婚者、虹色(1951～60年代には赤または暗赤色1色⁴⁾)の耳宛付きはアウトリダージェスと呼ばれる島の役人用である。年齢を重ねた者が独身者用の帽子を被っていることもあるが、それは配偶者を亡くした者であるか、あるいは既婚でも公式の場

以外では、紅白独身帽を被って若く装うことが許されているからである。幼い子供用には縁の部分に沢山襷を入れ日よけ兼可愛らしさも出している。

編針はかなり細い金属性（先が鉤状になったものもある）のものを5本使用し、首から糸を掛け、糸の張り具合、進み具合を調整しながら編む（写



写真8 編物

真8). 編み始めは頭回り寸法に輪にし上へと編んでゆく。編み方は平編である。外表状態になっているが、何故か内側（裏側）を見ながら編むので、実際は裏編をすることになる。時々表も確認するが、裏を見ながら赤地に白または色糸で細かい文様を入れてゆく。どこで糸を変えれば良いのかは、もうすっかり頭に入っていて皆何も見ずに編み進める。編み入れる文様は鳥、蝶、花、島の道等が多い。

男性は朝起きてから寝るまで1日中帽子を被って過ごす。みな制帽のように柄域も同じようなので、一度外してしまうと誰のものか見分けが付きにくい。特に祭の時などには、皆酒を飲み泥酔し、あちらこちらに帽子を忘れて、拾った者が自分のものにしてしまうことが多く、最近では帽子の端の方に自分にしかわからない目印を編み込むようになったという。

写真9は就学年時から結婚するまでの若者に被られている、いわゆる独身者用のものである。長



写真9 独身者用帽子

さは40~45cmで先に8~10cmのボンボンをつける。若い者程先に付けるボンボンは大きく、多色使いで派手である。極細糸できっちり編まれたゲージは縦100~120段/10cm、横65~70目/10cmという細かさである。この技術は父親から息子へ、伯父から甥へ、兄から弟へと受け継がれている。昔は口頭と所作のみで伝えられていたが、今では学校教育の影響もあり、図柄を方眼用紙に記し（写真10）習得している者もある。何回も同

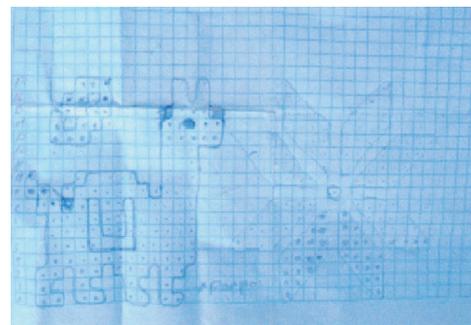


写真10 方眼用紙に記された編図

じ図柄を編み込むことにより何も見ずに編み進められるようになるのである。写真11は模様編み



写真11 兄弟で編物

に初挑戦する8歳になる弟に兄が編み方を指南しているところである。弟が被っているのは彼が初めて編んだものである。最初是这样した無地のもので、目の作り方、平編の方法、目の減らし方、始末の方法等基本を習得する。次に兄が被っているような少し大きめの柄物を、そして最終的には前述のような細かい精緻な作品ができるようになるのである。



写真12 熟練者の編んだ帽子(部分)

写真12は熟練者の編んだ既婚帽の編地部分である。文様の種類も多く多色使いである。しかし、

押し並べて独身者用の帽子の方が柄も細かく繊細で編目も細かい。それは「島では昔から、「帽子や帯には作り手の器量が表れる」と考えられていた。だから結婚相手を探すとき、まず目をとめるのも相手の帯や帽子なのだ。編み目の細かな美しい独身帽をかぶった青年は、「私は器用な働き者」という看板を掲げているに等しい⁴⁾」という自己アピールの手段として、重要な役割を果たす帽子の製作に日々努力を重ねていることもあり、彼らの精緻な紅白帽が生み出されているようである。湖水を汲み上げても、1分か1分半は水漏れがしないという編み目の細かさである。紅白の赤は、昔は鮮やかな赤と決まっていたが、今では小豆色のような暗赤色が流行している。

3.3 織物

織物は男性も女性も行う。男性は戸外にスペイン人により導入された高機を据え付け、家族の者が身につけるシャツ、ベスト、ズボン、スカート、被り布等の材料になる幅の広い大きな布地を織る

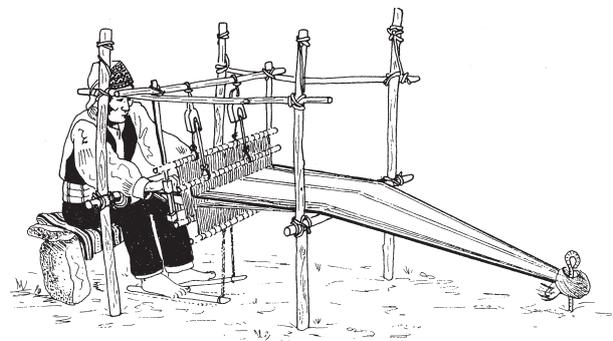


図1 高機

出典：Rita Prochaska, TAQUILE y sus tejidos, Arius, 1990

(図1)。シャツは白、ズボンは黒、ベストは白と黒、被り布は黒の羊毛が材料になる。スカート用には黒の羊毛をはじめ赤、オレンジ、黄、緑等の化学繊維も使用されている。普段は1~4枚を重ねて履くが、日曜日には6~8枚、祭り時には20枚にも達する。普段用には5m、祭り用には7m、結婚式用には10mの長さが必要であり、伴侶や娘の為に沢山の布地を織らなければならない。女

性にとって、夫もしくは父親の織ったスカートの枚数の多さが重要で、そこに男の威信も現れるのだ。裁断し縫製して形にするのも男性である。

女性は庭先に織物の長さに合わせて2本の棒を固定し、その間に経糸を張り渡し、何本かの棒や糸による綜統を使う簡単な織機で主に帯を織る(写真13)。新しい帯を織り始める際、その場所にココの葉を3枚捧げ、それを織機の杭で地中に埋め、完成時には杭を抜いた穴に感謝の意味でまた3枚のココの葉を置く。



写真13 織機

連続文様を織ることはあまりないので綜統の数は少なく、指先で操作しながら文様を織り込んでゆく。緯糸の打ち込みにはリヤマの脚の骨で作られた打ち具(ピチヨーニャ)が使われる。この織機は長さも幅も固定する杭1つで調節可能であり、帯(faja:幅約15cm,長さ約100cm:男女共に使用),ココ袋(chuspa:幅18~22cm,長さ20~25cm:成人男子が使用),儀礼用肩掛け(puncho:幅約120cm,長さ約200cm:役職に就



写真14 儀礼用肩掛けの準備

いた成人男子が使用,灰色を基調に虹色の縞が入る。使用時には縦4つ折りにし,中央部分に赤や灰色の柄入りの,両端に房をつけたチャリーナという幅15cm,長さ160cmの布を縫い付け,先は小枝を通してぴんとさせる・写真14)等,何でも織ることができ,途中で作業を中止する場合にはくるくると巻き取ることもできるという便利さがある。また,彼女たちは帯を織る為には,出来合いの枠機⁵⁾を水平または斜めに立てかけて使うことが多い(写真15)。どちらも出来上がりは四方



写真15 枠機

が耳状態になるのが特徴的である。この帯には先に幅1cm,長さ100cm程の細紐をつけるが,この紐は何の道具も使わずに織られる。その方法は,地面に釘4本を打ち,整経した経糸に数か所糸綜統を施し,釘から取り外した片側の輪を足の親指にかけ,もう一方を胴に安全ピン等で固定し張りを持たせ,後は手指だけで織り上げる(写真16)というものである。娘が自分の親指の代わりに,母親の織機の一隅に経糸の先を固定し作業をする姿も見られる。母親と一緒に作業を進めながら,自然に次の段階の織技術を吸収していくのである。習い始めはこのスタイルで丸,三角,四角等の連続模様,次に鳥や畑などを抽象化した柄物へと経験を積んでゆく。また,まったく整経なしでできる丸紐は組紐仕立てだが,糸を継ぎ足しながら無限に長く織ることができ,多色使いで目玉状



写真16 細紐

に入る柄は文様表現の初歩となる。この細紐の次は写真17のように、幅2~3cmの、縞を何本か入れ中央部に丸状の連続模様を入れる細帯（上段）に挑戦し、次に細紐で織り込んだ文様を入れ（中段）、的確な糸の選択、整経の仕方、綜統の使い方および織物の構造や個々の図柄を理解するようになる。この学習段階は12歳くらいまでに終わり、次に、下段のような幼児用の帯に着手する。幅、長さは大人物より少ないが、1段ごとに文様を出してゆく細かい織ができるようになる。この技術は12歳から16歳くらいまでに習得されている。



写真17 段階帯

彼らの日常身に付ける帯は織手により多種多様な図柄が織り込まれるが、配色や織位置に一定の法則がある。地色は赤を基調に緑、茶、黄、桃色

等が使われ、白で文様が表現される。両端に細かい連続模様または細紐に織り込まれるような簡略化された柄がライン状に並び、内側に向かって赤の無地、細かい連続文様、赤無地となり、中心を緑、その両側を茶にした中央部分に鳥や家畜、教会、学校、祭広場などの文様が配される。昔から伝えられている季節の行事や生活習慣等の図柄に加え、今ではより生活に密着した自分がきれいだと思うもの、入手したもの、ほしいと思っているものや願い事等も織り込まれるようになった。デザインや織順序は母親や姉妹、あるいは夫に相談する。彼女たちは考え、見ただけでデザインを頭に刻み込み、下書きもせずに織ってゆく。

島の織物に詳しい Ines Mamani Machaca によれば、昔は、地には濃い赤、地味な桃色、薄い青、緑の濃淡という限られた色しか使わず、そこに真っ白で大きな模様を、模様が目立つように間隔



写真18 昔の帯

をあけて織っていたという（写真18）。最近では色も多彩になり、柄も細かく沢山織り込まれるようになった（写真19）。さらに1つの図柄が複雑であればあるほど美しいとされている。

織構造は緯糸が全く見えない程経糸を密に織り込んだ平織である。文様部分は二重の経浮織技法であり、従って裏側は表と反対色の同じ図柄が表れている。文様に合わせ、指先で経糸を1本ずつ選り分け緯糸を通しビチョーニャで強く打ち付ける（写真20）。1段ごとに進められるこの一連の動作により徐々に文様が生まれる仕組みである。



写真 19 現代の帯



写真 20 帯の織り方

基本的に文様表現に経糸が飛ぶのは2本程度であり、特に自家用の帯の中心部の文様は1段ごとの経糸の上下だけで表現されている。平均して1cm四方縦12本、横22本という織り目で、厚みは地の部分で0.1cm、文様部分は0.18cmである。本体を織り上げると機から外し、残りの糸を20本程の3つ編に組み分ける。その先は地糸を3本強く撚り合わせた糸で束ねられ、1つの帯が出来上がる。鮮やかな染色済みの糸を駆使し、多彩で以前にも増し細かい文様が織り込まれたものも出てきているが、基本構造は守られている。

整経から織りまでのこの複雑な技術は編の伝承

と同様に、女系、いわゆる母から娘、伯母から姪、姉から妹へと受け継がれている。

3.4 編・織文様

タキーレの人々が編・織技術と共に親から子へと伝承しているものの1つに「文様」がある。それには、畑、鳥、祭、星等数多くのものが見られるが、それらの意味するところは農耕に関するものが多い。写真21は農事暦を織り込んだ「カレンダー帯」である。この帯は1981年にはいくつかの図柄しか見られなかったが、5年後には現在の体系が出来上がり、店に並べられるようになった²⁾という。観光客に喜ばれるので今では皆が織っている。文様自体は昔からあるものであり、織手により外側の織り込み文様や図柄の大小という多少の違いはあるものの、順番はもとより、中央部の図柄の形は忠実に守られている。農作業の始まりは普通8月からだが、右側から順に1月から12月と織り込まれている。文様の意味の解釈も人により様々だが、以下に、聞き取りと文献^{6,7)}により総合的に捉えた結果を示す。

1月：種播きを終える月：喜びの月：じゃがいも、オカ芋、とうもろこし、空豆、キヌアなどは



写真21 カレンダー帯

すでに播種が済んでいるが、天候の様子を見ながら残り的大麦、小麦の種播きをする。図柄は薔薇の花と言われているが、六角形はタキーレ島の6つの地区または耕地を表し、三角形の中の数個の点は1つはじゃがいも、2つはオカ芋、3つは大麥である。空白のものは牧草地、刈込済の土地、次の年のために用意された耕地である。

2月：祭の月：カンデラリアの聖母祭とカーニバルを表す。波線は休耕地、大きな模様は祭壇のバラと呼ばれ、旗を伴って新しく選ばれた優れた役人を表す。鳥柄はピチタンカという島の雀で、リマ、アレキパ、プーノから帰ってくる出稼ぎの人々を表す場合もある。この鳥は害虫をついばみ、農作業の手伝いをしてくれたり、訪問者を知らせてくれるとの理由で島民に愛されている。

3月：大地への支払いの月（島の聖地ムルシナ山で供物を捧げる）：大きな菱形は祭壇または星を、中の菱形は地母神パチャママを表す。大小6つの鳥はイスユという水鳥で、何羽の雛を孵すかによって作柄を予想する。周りの旗はそれぞれ妻を伴った新旧の長老が協議中であることを示す。

4月：収穫の月：花はじゃがいも、とうもろこし、空豆、オカ芋、大麥等様々な作物が順調に育っていることを表す。また、聖週間に集める薬草やまじない用の草束も表す。不作の年には、花

の代わりに鳥を織ったりする。鳥はカティカティで飛翔が東から西であれば良い年を、反対に西から東ならば悪い年を表す。

5月：ペンテコステス（聖霊降臨祭）の月：祭の祭壇と長老たちの合意を意味している。この月には、聖十字架祭、結婚式、ペンテコステスの3つの祭がある。周りの旗は結束した長老たち、内部の白い連なりは祭壇の聖杯、パンである。中央の菱形は必ず緑色で、パチャママへの捧げものを表す。

6月：家作りの月：太陽の祭の月：収穫のすべて終了したところで、家を建てたり修理をする。家は5月に収穫された作物の保存も象徴化している。旗は6月24日に行われる羊祭を、菱形はパチャママへの捧げものを表す。6月24日にはサン・ファン（聖ヨハネ）祭と同時に、羊のためにサン・ファンのご加護を祈る羊祭も行われる。放牧していても所有者がすぐわかるように、羊に色を塗ったり耳と頸に糸の飾りを付ける。また他の家畜にも色を付けたたり様々な色の羊毛で飾り、繁殖を祈願する。昔は早朝ティティカカ湖の聖水を羊と共に浴び、日の出を拝んだ。

7月：祭の月：星の月：この月に星は天空に最もはっきり表れる。ママチャ・カルメン祭（カルメンの聖母祭）やサン・サンティアゴ祭（聖ヤコ

ブ祭)が行われる。三角形と旗は7月16日にカルメンを祝うことを長老たちが合意したことを象徴化している。4本の柱は聖母の輿である。以前サンティアゴ祭は1頭の馬で表現し、食糧不足の時期に備え大麦、とうもろこしをサンティアゴに捧げた。昔の稲妻の神の祭の代わりとなるものと考えられている。

8月：今年の作柄を占う月：湖の魚（スチ）の行動や、藻の生え具合、風向きや鳥がどこに巣をかけるかなどを見て、天候と作柄を占う。スチが約2mの深さに潜り小石で遊んでいれば良い年となり、かなり深いと雨の多い年、浅いと早魃になる。また東からの風は良い兆しであり西風は悪い年の予兆である。

9月：種播きの月：オカ芋についてじゃがいも、大麦、空豆、とうもろこしの種播きをする。図柄の意味は1月と同様である。昔は各家庭でも沢山の土地を所有していて、島の区分に習って自分の畑も6つに分け輪作をしていた。しかし最近はその家庭でも家族が増え、子供全員に平等に土地を分ける慣習のため、どんどん耕地が細分化され、この習慣は消えつつある。国勢調査⁸⁾によれば、タキーレの人口は、1940年—215人、1981年—1148人、1986年—1500人（1986年の推定）となっている。冒頭の2011年の推定人数2500名前後という数字を合わせてみると、約70年経過の中で10倍以上になっており、着実に人口が増えていることがわかる。

10月：引き続き種を播き、パチャママに支払いをする月：大きな図柄は光線を放つ金星、中央の菱形はパチャママ、中の四角は島の4つの聖地に供物が供えられていることを表す。多くの丸は1ヶ月の30日の気象観測、その隣の波線はキープ（インカの時代文字の代わりに情報伝達に使われた結縄）を表す。10月はじゃがいもの種播きの季節で、前もって天空を観察する。もし月が大きな星と一緒にあり上弦の月であったり、新月なら種播きには良くないとされている。

11月：雨乞いの月：左の小さな旗は「諸聖人

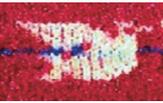
の日」、隣の大きな旗は翌月のクリスマス、残りの10本は新旧（25日に選挙が行われる）5人ずつの島の権威者を表す。下の三角は島の聖地への道または諸聖人の日のための祭壇を表す。菱形はパチャママで、雨乞いの儀式（蛙を捕まえ聖地ムルシナ山に登り、祈りを捧げる）や選挙前に捧げものをしなければならないことを表す。

12月：鳥を見て天候を占う月：図の中の鳥はピチタンカ、沢山の雛をつれた雌鳥で食糧の備蓄がないことを表している。昔、12月は食糧も少なくなるつらい時期で次の作柄が気になり、鳥の行動を観察して今度の作柄を予測していた。最近では観光による副収入があるためそれ程深刻ではなくなったこともあり、左の4羽はタキーレの外に出稼ぎに行く人たち、畑をつついているピチタンカは島で待つ人たち、あるいは新年を待ちわびる人々を表すとも言われている。

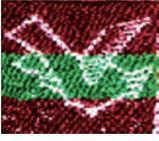
以上カレンダー帯に見られる象徴的表現とその意味について記したが、彼らの作り出す編物や織物には他にも数多くの文様が見られ、その図柄は100種を超える。昔から連綿と編・織り続けられている文様を中心に表1にまとめた。尚、名称については現地の言葉（ケチュア語またはスペイン語）のまま示した。

全体的に、鳥は星、魚と共に農耕と関連付けられるものとして数多く出現していることがわかる。鳥や魚の行動により作柄や収穫の時期を予想したり、星の位置や輝き方で種播きの時期や霜、霰、雨の到来を知るからである。また、鳥は白い蝶と同様に、幸運をもたらす象徴としても採り入れられている。しかし、同じ鳥でも行動や鳴き方によって死を予測させるものもある。ALKAMARE（オオタカ）が争う姿や家鴨の夜鳴き等である。このように、1つの文様でも幸運と死を同時に表し、人の一生には良い時も悪い時もあることを知らせている。実際に織り込まれる場合には、幸せを願って、特に独身者の帯には多くの鳥が配される。また、若夫婦の帯には、夫婦を表す家鴨や鳩に、夫婦が願っている子供の数と、同じ数の雛が

表1 文様の意味

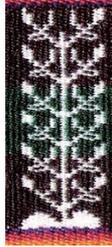
文様	名称	意味	配置
	CINTA LAURE	花の季節を表す。鳥中が緑になり、道、段々畑など、すべてが花でいっぱいになった様子。	CHULLO (帽子)
	PICHITANKA	①良いことの前兆となる鳥。②誰かが来ることを知らせる。力強く鳴く時は優しい声で話す人、小さな声で鳴く時は大きな声で話す人である。③種播きの時期に沢山飛んでくると豊作になる。④じゃがいもの上で卵を抱くと雹は降らない。⑤3回鳴いて良い年が来ることを知らせ3個の卵を産む。悪い年が来る時は1回しか鳴かず、卵も1個しか生まない。	FAJA (帯)
	PALOMAS	幸福、繁栄の象徴。	FAJA
	ALKAMARE, MARIONITO	①雹が降るかどうかを知らせる。②2羽が争うとある人の不幸を、3羽が争うと死を意味する。③1羽は赤ちゃんの死、2羽は独身女性か未亡人の死を意味する。④種播きの時に戻ってくると幸運を表す。	FAJA
	LORENZO	ロレンソと呼ばれるハチドリで、幸運を意味する。灰色のハチドリは普通だが、首が緑色のきれいなロレンソがやって来たら良い知らせがある。	CHULLO
	PHISKO	これは体が真っ黒で目の周りだけが赤い Miji という小鳥で、羽の広げ方で風向きを知らせる。	CHULLO
	CHIWANKU (CHIHUACO)	その年の農作業の指針となる。灌木の中に巣を作れば良い年を示し、その卵を段々畑の中に隠したら収穫は期待できない。	CHULLO
	LEQE LEQE	いつ霜が降り、雹が落ちるかを知らせる。雹が落ちて来るときは沢山の石ころを集める。巣が植物の下で守られていたら、その年は霜が多い。沢山の黒い卵を抱いていると、じゃがいもの収穫に問題がある。	FAJA
	KECHE	強く鳴く時は雨をもたらす。じゃがいもの植え付けをしているところにこの鳥が来ると不作になる。	FAJA
	CEBADA O TRIGO	脱穀してすぐ食べることができるようにしてある大麦または小麦。祭の時にはこれでスープを作る。	CHULLO
	TICRAY QUENCO	カーニバル、カンデラリア、ペンテコステス、サン・サンティアゴ等のすべての祭。	CHULLO
	MARIPOSA	①白い蝶が周りを飛ぶと幸運のしるしで、願いが叶えられる。青や緑、オレンジも良いことだが、赤に黒の斑点は人への中傷、黄は噂話による絶交、黒は死を表す。②心配事を抱えて働きに出た時、白い蝶に出会ったら、その1日は幸運であることを意味し、他の色で、特に黒だったらその日は十分注意しなければならない。	CHULLO FAJA

文様	名称	意味	配置
	IGLESIA	中央広場にあるカトリックの教会、何かにつけ関わり深い建物。	FAJA
	MATRIMONIO	結婚の旗は新郎、新婦とそれぞれの代父母とが結婚式の時に会う場所の両方に立てられる。中央の柄は①結婚式の時の4つの部屋を表し、新郎新婦の部屋、代父母の部屋、結婚式を祝うためにやってきた客や友人たちの部屋と新郎新婦のプライベートな部屋である。②子供が結婚すると家と土地が与えられる。それぞれの、両親と住んでいた家と土地とを表し、相続することを示している。	FAJA
	ALTAR	ペンテコステスの祭の祭壇で、中央には教会から運ばれた絵がかけられている。上部の鳥は白鳩で聖霊を表す。下部左の図柄にはコカを包む布と机、右の図柄にはアウトリダーデス（祭の主人役）とその妻たちの姿がある。この祭の歴史は古く、キリスト教が入ってくる以前は「塔の祭」と呼ばれていた。	FAJA
	DANZANTES DE PENTECOSTÉS O SIKU TUSUJ	ペンテコステスの祭の踊り手達。上に下へと踊り競争する。下側が勝つと幸運を意味し、上側が勝つと不作になると信じられている。	CHULLO
	SAWAS Y PACHA, ESCALERA	あの世での暮らしには、様々な段階がある。それは自分たちの今いる世界での人生の段階と同じである。	FAJA
	LLAMA	リャマの飼育の習慣はないが、毛は編物や織物に、骨は織物の打ち込み具に使われ、昔から生活との関わりが深い。また胎児は供物としても使われている。	CHULLO FAJA
	TIJERA	大きな鋏は島の主要道、小さな鋏は自分の家と近所や親戚の家を結ぶ小さい道を表す。	Chullo
	GAVIOTA	前年の気候状況を表す。雛がすべて同じなら天候が良く、不完全であれば悪天候であった。羽が欠けていれば不作、脚が欠けていれば霜が多かった。雛が小さいと早魃だった。	FAJA

文様	名称	意味	配置
	PATO	①沢山卵を産んだら豊かな収穫がある。②種播き済の岸辺の畑で雛が道に迷って死んだら、その畑に豊穡をもたらす。③夜この鳥の鳴き声を聞いた人やその家族は3日以内に死ぬ。強い声だったら男性、弱い声だったら女性に影響がある。	FAJA
	RUINAS	タキーレにある遺跡、インカ以前のもの。	FAJA
	CHACRA DE ANDENES	島中の段々畑。	FAJA
	ROSAS DE SEIS PÉTALOS	島の6つの土地の耕作状況（ローテーション）。三画形のなかの1つの花はじゃがいも畑を表す。じゃがいもは3年間土地を休ませた後初めて播かれるので重要である。他のどんな作物とも一緒に種播きをしない。2つの点はオカ芋、3つはとうもろこし、空豆、キヌアを表す。	FAJA
	GATO ROSAS, MUELLE	①島の6つの地区を表す。②棧橋、船着き場を表す。1年ごとに交代で番人が決められる。彼らは星を見て風があるかどうかを判断する。	FAJA
	CHASCA QOYLLOR	金星を表し、月の近くで輝いていて風のない時は種を播いてはいけない。単独で弱い光であれば農作業には良い状態。	FAJA
	KOSCAN CHASCA	チューニョ作りに良い時刻を表す。夜間が凍てつくように寒い乾季の8月、この星の輝き始める朝3時頃に起き出してじゃがいもを野外に広げる。この時間が最も冷え込むのでよいチューニョができる。	FAJA 細紐
	CHASCA QOYLLOR	8月の初めの農業開始時に、この星の位置を見て1年を予測し、いつ、どのように何の種を播くかを知る。	FAJA
	CINTA LABRE, SUMAC WATA	収穫が沢山あって良かった、という年に織る。	細紐
	MAL VIENTO	湖を渡るには向かない風の吹く時期。	細紐
	CERRO U ORQO	タキーレの風景。	細紐
	KATE KATE	①太陽が出る処を飛んでいけば良いことで、沈む場所を飛んでいたら死を意味する。②この鳥が夕方早足で歩いていたら誰かが死ぬ。	背負い布
	ESCALERA	①島民が毎日通る石でできたでこぼこ道。②天国へ上る階段。	背負い布

タキーレ島の編・織文様と生活文化

文様	名称	意味	配置
	PACHAMAMA (YUYARIY)	島の聖地ムルシナ山で、畑の収穫物を大地の母パチャママに供えることを表す。	背負い布
	OVEJA	毛は編・織物に使われ、糞は畑の飼料、頭単位では祝い事の贈答用として使われる大変重要な家畜。	帯
	JUCHUICHAC QOYLLOR	無数にある名もない小さな星々と流れ星。	背負い布
	PUITU RAUKANA	女性が草取りに使う小さな農機具が4つ重なっている様子。上下の○は刈り取った束。	CHALINA
	CHACRA ÑAN	中央を斜めに大きな道が通っていて、その両脇にあらゆる種類の農作物が植えてある様子。大きな道とは島の港と広場を結ぶ道、広場と学校を結ぶ道等のこと。	CHALINA
	BANDERA	広場の役場や母の会に旗が掲げられている様子。旗は誰か重要な人物が島を訪問する時、島の集会がある時に掲げられ、その日は農作業は一切行わないという習わしがある。	CHALINA
	CHASCA RAUKANA	①星と農機具②内部にあるのが男性用の大きな農機具、外側は畑で様々な種類の作物を植えた仕切りを表す。	CHALINA
	CORO	畑にいる芋虫、鳥たちが啄む。	CHALINA
	UJIA CANCHA	四角が羊の囲い、線は各畑の仕切り。	CHALINA
	CADENA	家族の絆。	細紐
	JALLPA PATECUNA	土が崩れて下に落ちないように、石止めのある段々畑。	細紐
	FINA CANCHA	戸外の倉庫のようなもの。左右それぞれの囲いにじゃがいもとオカ芋を分けてしまうと長持ちする。今では何でも家の中にしまいが、この模様は残っている。	細紐
	ÑAN	島の大きな道と小さな道、○は囲いや家、山型は大きな道、上についた2本の線はそこから枝分かれする小さな道。	細紐
	JALLPA TIJIRAY	雨季が始まる前、種播きに備えて土を掘りおこす。	細紐
	HAYLA	島中で収穫が終わり、どこの畑にも何も残ってない様子。仕事が全部済んでやれやれという気持ちも含む。	細紐
	TIJERA	文様の形から鋏と呼ばれるが、島の6つの地区全部の畑に、作物が育っている様子。	細紐
	RANA	畦道のまわりに沢山生息している蛙。雨乞いの儀式にも使われる。	細紐

文様	名称	意味	配置
	RATON MOSCAS	あまり歓迎されるものではないが、細紐にはよく登場している鼠と蠅。	細紐
	VACA	土地を耕したり、牛乳や肉を提供してくれるので島の人々に愛されている。	細紐
	ANDENES	丘にある畑。	細紐
	CASA DE MATRIMONIO	結婚して新しい家を建てることを表す、または建てたこと。	細紐
	MUÑA	頭痛やほかの病気の治療に使われるミント系の植物、香りを嗅いだり、お茶にして飲む。よく繁殖すればそれは空豆の豊作も意味している。8月のはじめに開花し、その開花途中、花が完全な形かそうでないのかを見てその年の収穫状況を予測する。	FAJA

織り込まれている。

上述の柄に次いで、畑をはじめとする島の風景が多く見られる。島民が毎日上り下りする石段の道（写真22）は、ESCALERAと呼ばれ、道そのものに加え、天国への階段も意味している。文様1つにも多様な意味があり、個々の編み手、織り手の製作時の心境も反映されているように感じられる。



写真22 石段の道

レの人々の生活に入り込み、情報、記録手段として存在しているのである。

4. 若者の編・織の現状

若者の編・織の現状について10～19歳の男女95名を対象にアンケート調査を実施した。95名の内訳は、男子57名、女子38名である。調査時期は2011年3月、主な調査項目は①編・織物を開始した年齢、②好きな文様とその意味についてである。

その結果、①の開始年齢は男子の平均は6.75歳、女子は7.14歳であった。男女共最も早い開始年齢は4歳で、最も遅い年齢は男子の場合10

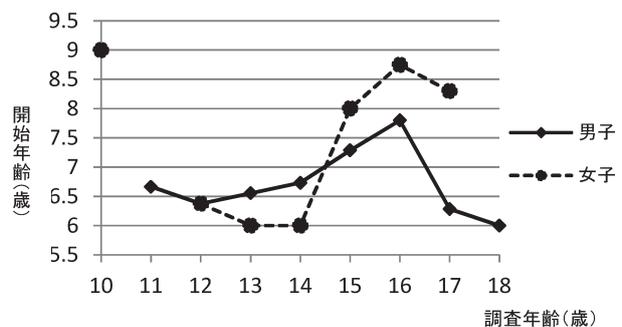


図2 編・織物の開始平均年齢

以上のように編・織文様はあらゆる面でタキー

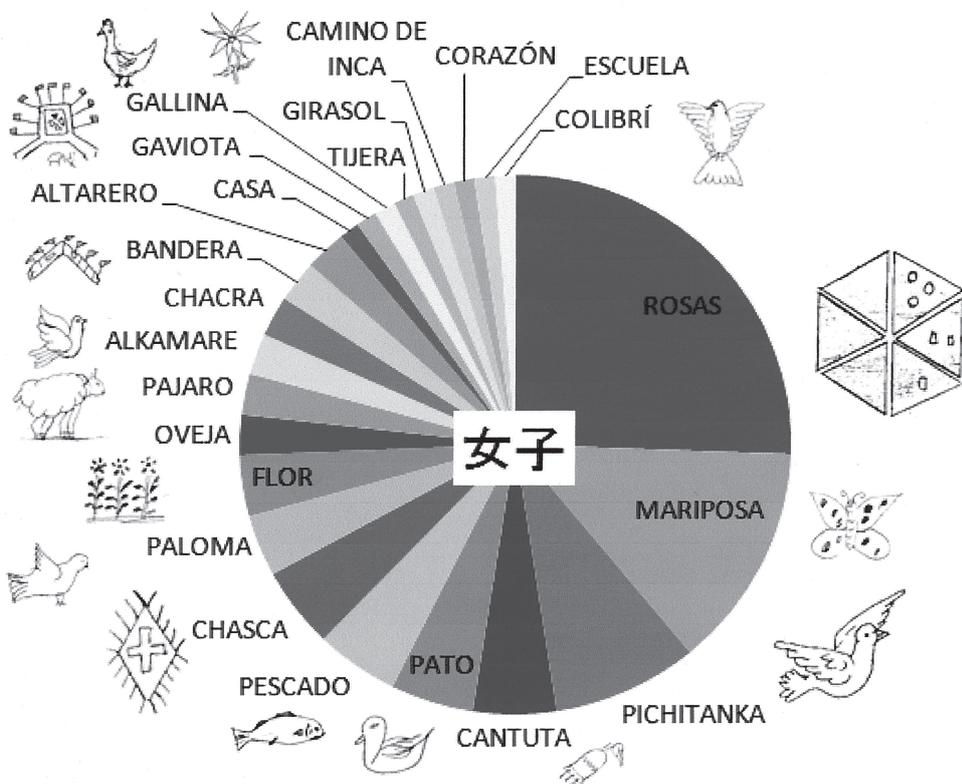
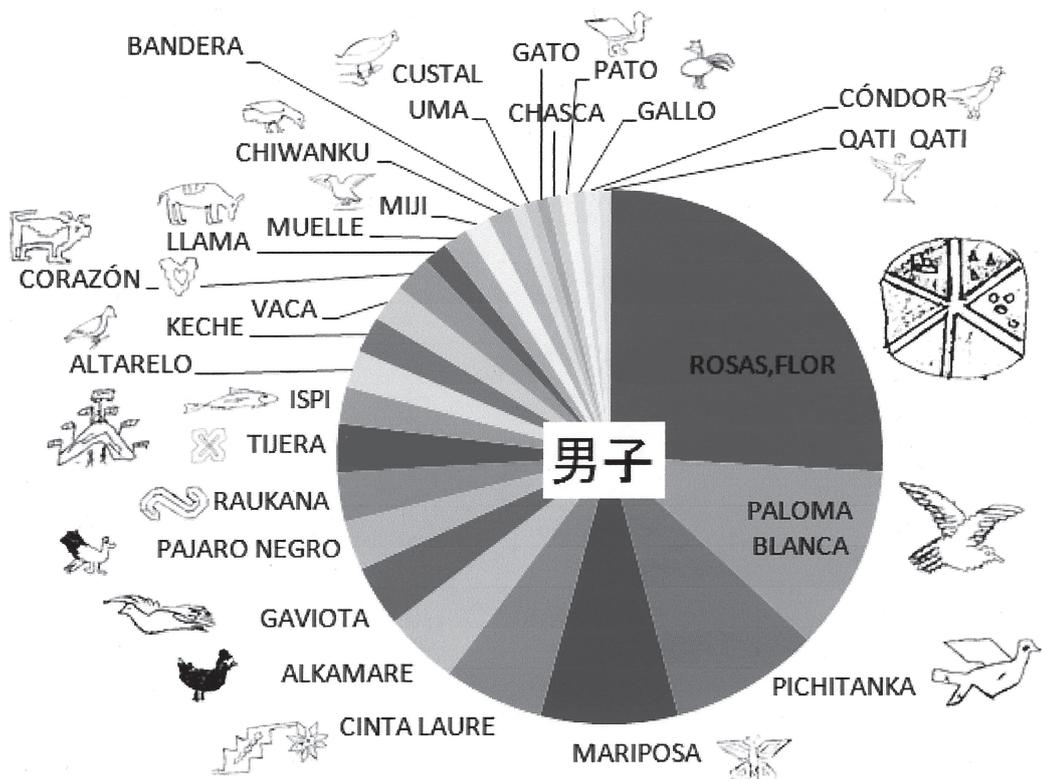


図3 好きな文様

歳、女子の場合は11歳であった。男女の年齢別の開始平均年齢を図2に示すが、全体的に男子の方が女子よりも早い時期に着手している結果となった。②の好きな文様については、複数回答形式で図柄表記を含め、数多くの回答を得た。その結果を図3にまとめた。尚、名称については回答者の記述通り、ケチュア語あるいはスペイン語のまままで表記し、図柄の一部を添えた。

男女共に最も多く挙げられた文様はタキーレ島を表す六角形で、名称は「ROSAS (薔薇)」とする者が多かった。次に上位を占めたのは鳥や蝶であり、男子の場合は鳥の中ではPALOMA BLANCA (白鳩) が最も多く、次に PICHITANKA, MARIPOSA, CINTA LAURE, ALKAMALE, GAVIOTA (鷗) という順であり、女子は MARIPOSA, PICHITANKA, CANTUTA (カントウータ：ペルー国花), PATO という順であった。また新しい図柄としては CORAZÓN (ハート), GATO (猫), GALLINA (鶏), CÓNDOR (コンドル), FLOR (花), GIRASOL (ひまわり) 等が挙げられた。

男女の違いは、男子だけが帽子に編み込む CINTA LAURE があり、女子は花の図柄が多く見られたことである。その他の文様については順位の差はあるが概ね共通のものであった。

文様の意味については3.4に述べた内容に加え、CINTA LAUREは「良い将来への階段」、PALOMA BLANCAは「友情」、「雨を呼ぶ」、KECHEは「じゃがいもの収穫を台無しにする」、RAUKANAは「じゃがいもの種播き」、TIJERA (鋏)は「4つの季節」、「ある人との縁切り」等が挙げられた。特に PICHITANKA については「魔法を使う」といった内容の回答が多く見られた。

今回の調査においては、無回答のものは無く、対象者全員からすべての項目に回答を得た。着実に次世代へと文様の図柄とその意味および編・織りの技術が伝えられていることが示唆された。

写真23は17歳の女子によって織られた帯の文

様部分である。文字入りのハート柄や鳥、動物が大きく具象表現されている。

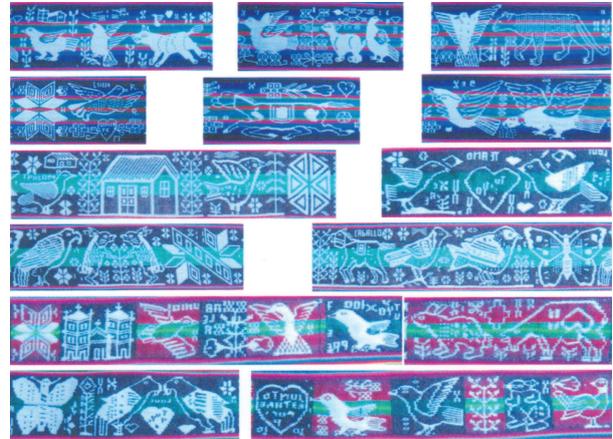


写真23 若者によって織られた文様

各世代はそれぞれ自分たちの時代を生きる。色とスタイルには生きている時代の人々の感情も表われている。帯など女性たちが作る織物の殆どは、そのデザインがいくつか変更されてきた。新しい図柄が現れ、そのサイズも大きくなり、連続した図柄が好まれ、より装飾性の高いものになっている傾向が見られる。

5. おわりに

タキーレ島の人々の編物・織物に見られる文様の抽象的表現と生活文化との関連性について調査した結果、文様の意味するところは、彼らの生活の中心である農業と最も関連深いことが分かった。編・織り込まれる文様には鳥、魚、星、祭、畑、大地の神、農機具などが多く見られる。鳥や魚の行動、星の位置を観察することで、雨、霰、雹の時期や風向きを予測し、何の種をいつ播くか、収穫の時期等を決めるのである。彼らは農耕歴を示すカレンダー帯に織り込まれた図柄通りに、8月に1年間の天候と農作業を予想し、9月～1月は播種、2月は祭、3月は大地の神パチャママに供物を捧げ感謝し、4月は収穫、5月は祭や結婚式、6月は農作業が一段落したところで家

作りや修理, 7月は祭で豊穡と感謝をこめて踊るといった1年間を送っている。男性は帽子と帯に, 女性は帯に彼らの生活のあり方や理想を文様として編・織り込み, 祖先から受け継ぎ, 次代に繋いでいる。長い歴史の中で育まれた文化を大事にし, 豊穡を星, 鳥, 魚に託し, 蝶や鳥に幸せを願い, 自然と共存して生きている。言いかえれば文様は彼らの生き様そのものと言っても過言ではないと考えられる。その生き方は編・織技術と共に次世代に連綿と受け継がれていることもわかった。島民の老若男女が皆タキーレ島の独自性を重要視し, 日常的に民族衣裳を身に付けているから, こうした選択も含めて伝統的な価値観や風習が容易に伝播されているのかも知れない。

彼らは「昔からそうだったから」と4.5歳になると糸紡ぎから始め, 編物, 織物の技術を身に付けていく。それが島民にとっては「当たり前なこと」で, ある一部の人々の仕事でなく, 島民全員の仕事なのである。農業, 編物, 織物という同じ作業を共有することで彼らのコミュニティ意識も保たれている。3.4の文様の意味の項で述べたように, 鳥の行動で死を意識せざるを得ないような, 標高4000mの過酷な自然環境で暮らす彼らにとって, コミュニティは大変重要な役割を果たしているのである。

島には毎日のように観光客が訪れ, 昼の2, 3時間はカメラを手にし, 特に男女差のない服装をした人々で賑わう。しかし, その間もさることながら, 観光客が去って静まり返ってからも, 島の人々は何事もなかったかのように編み, 織り続けている。携帯電話, その他の電化製品も置かれるようになり, 世界のニュースも入るようになった環境下で, いつまで現況が維持されていくのか, 生活環境の変化は, 「当たり前」のように続けられている織物や編物や生き方の伝統が当たり前でなくなる時代がやってくることをも示唆しているように感じられてならない。その変遷はどのような形態をとるのか, 現段階ではまったく推測し難いが, 彼ら独自の精緻な編・織りの技術と守り続

けている伝統は何らかの形で残していったほしいものである。

聞き取り調査においては Ines Mamani Machaca, Felipe de Jesús Huatta Cruz, Enrique Mamani Machaca 一家の協力を得た。

謝辞

本稿をまとめるにあたり, リマ在住の飯尾響子氏には島民の聞き取りおよび調査の解釈を始め, 終始にわたり温かいご助言を頂きました。また, 校閲は小林茂雄氏の協力を得ました。

記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 伊地知美知子, タキーレ島の衣生活とその背景, 文教大学紀要, No.37, 2003
- 2) Rita Prochaska, TAQUILE y sus tejidos, Arius, 1990
- 3) 飯尾響子, ナスカの壺 ペルーからの手紙, JTB, 2000
- 4) 飯尾響子, 季刊「銀花」第161号, 文化出版局, 2010, pp.106-107
- 5) 吉本忍, 縦横無尽 タテとヨコ 色とかたちのフィールドワーク16 タテ糸の張力と織機の形式6 枠機, 染色α, No.285, 2004
- 6) Tejemos nuestra vida, Instituto Nacional de Cultura, 2009
- 7) Taquile y su arte textile, Instituto Nacional de Cultura, 2006
- 8) Matos Mar, Taquile en Lima, Fondo Internacional para la promocion de la cultura. UNESCO, 1986